

# RadioDays



## ラジオデイズ

声には、人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」12月号 (通巻第19号)  
2008年11月28日発行  
[発行人] 赤塚祐一郎  
[編集人] 大森美知子  
[発行所] 株式会社ラジオオカフェ  
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F  
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281  
http://www.radiodays.jp

12

December Edition  
2008, vol.19  
Free of charge

### この人の声が聴きたい◎12月 小田嶋隆さん (コラムニスト) ひねりの効いた毒舌使いの、ひねられていない日常



土砂降りの雨の中を、おだじまさんはやってきてくれた。ラジオの収録の約束があったからである。いつも原稿の締め切りを守らず、編集者泣かせのライターという評判があるせいか、約束の時間に現れないのではないかと漠然と感じていたのだが、二十分も前に姿を現してくれた。それだけで、私は感激してしまつたのである。あの寸鉄人を刺すような文句はプロの物書きのなせる業なのであつて、生身のおだじまさんは礼儀に篤いソフトな常識を知る大人である。ときに下品で、ときに攻撃的で、毒のあるコラムを量産しているが、そのアイロニカルな文体の背後からいつも聞こえてくるのは含羞の声である。意識しようがしまいが、読者はおだじまさんの文体のその倍音にやられてしまう。

「コラムニストという肩書きを使っていますね」「いや、何でも良かったのだけど、エッセイストとだけは呼ばれたくなかつたもんで」「たしかにエッセイスト小田嶋隆って違和感がありますね」

「エッセイってさ、芸能人の身辺雑記みたいなものか、気取つた文士風情の手慰みみたいなところがあるよね。随筆家つてのも恥ずかしいわけ……」

で、コラムニスト小田嶋隆が出来上がったわけである。エッセイストよりはワンランク下に自分を位置づけて、ワンランク上の人々の構えを笑っている。この位置取りが、おだじまさんの文体の秘密なのである。矜持のありようにひねりが効いている。それは演歌歌手のうなりのようでもあり、こぶしのようでもある。このひねりがおだじま文体の魅力な

のである。政治でも経済でもスポーツでもロックでも地名でもおだじまさんはひねる。「こららくえん」は、「うんこくらえ」になり、阿佐ヶ谷は「朝が嫌」になるのである。駄洒落じゃないかつて。いや、おだじまさんはもう一回ひねっているのである。「うんこくらえ」のイメージが「後樂園」に貼り付いて、もう「後樂園」は無臭の「後樂園」ではなくなつてしまふのである。

たとえば「わたし、脱いでもすごいんです」ではじまる、『エステ軍拡競争の世紀末』というコラムがある。抜かすの宝刀。そして、これはなんだか核兵器に似ていると書く。そして、こんな風が続ける。

——実際に実践の場で使用するのはどうかという事情を超えて、「使つたらすごいんです」という予感のものとすが、核をして抑止力たらしめているのと同じように、「脱いだらすごいんです」という認識は、脱ぐ脱がないの虚実を超えて肉体を兵器化してしまう。

〔日本問題外論〕一九九八年朝日新聞社刊  
エステ業界の戦略を語って、国際政治を比喩に使っている。国際政治を語るのに、分かりやすいゴシップを比喩に使うことはあるだろうが、そんなひねりのないことはおだじまさんの羞恥心が許さない。主客転倒。それでも国際政治の不条理が浮かび上がってくるのである。おだじまさんの文体は、大上段に振りかざす佐々木小次郎というよりは、棒切れを使って敵を打つ宮本武蔵の骨法なのである。そりや言い過ぎだろつて。いや、武蔵は小杉なのです。(すまない)

(ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

### ただいま入会随時受付中!

会員(登録無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

### 〈対話・放談〉

小林秀雄賞受賞の気鋭の思想家 家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美が輝々たるお客をお招きして語り尽くすダイアローグシリーズが好評。音の旅「小糸川・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」もお届け中。さらに芸能史研究家の山本進さんが一問一答形式で落語の疑問に答える『たのしい落語』、文化人類学者の西江雅之さんと詩人の小池昌代さんのことをめぐる異色の対談『文化人類学者と詩人の異郷ランプリング』が新登場。どちらも現在、第一回を無料ダウンロード中です。

### 〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優馬九せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三郎朗読による江戸弁で聞く落語調『ゴリ』『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

### 〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチャオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

# オリンパスシンクする寄席

【日時】12月17日(木)午後6時45分開演(午後6時15分開場)  
【場所】お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

## 昔昔亭桃太郎

春風亭柳昇入門、昭和五年真打昇進。趣味は、一人旅、喫茶店めぐり。ピートルズ、プレスリー、裕次郎になる夢を捨て、本人曰く地道な落語人生をゆく。幅広い趣味と思索、活字中毒が奏効しての奇想で客を七転八倒させる最強のナシセンス王者！



## 瀧川鯉朝

春風亭柳昇入門。平成一五年、柳昇死去のため、鯉昇門下に移籍、一八年真打昇進し、「瀧川鯉朝」と改名。新作落語では大潮流をなす春風亭柳昇一門のなかにおいて、ブランクかつマニアックな新作落語の演じ手としても高いが、実は古典落語も実力派。



# 明烏い話

連載第20回 本田久作

談志は「落語は人間の業の肯定だ」と喝破した。多くの人がこの言葉を聞いて、うへへとひれ伏した。私はこの名文句をはじめて知った時、上手いなあとは思ったがひれ伏しはしなかった。それどころか、そんなことは言われなくても知っているよ、と思った。私はその時すでに『らくだ』を聞いたことがあったからだ。しかも私は大阪の人間だ。

だから、この談志の言葉に感心したのは東京の人だけだと思っていた。まあ、あと田舎の人でも感心するかもしれない。けれども大阪の人間は感心しないだろう。地球が丸いことは今もって疑わしいが、人間が業でできていて、それを肯定しなくては生きていけないことぐらい大阪では常識である。それなのに大阪の人間でもこの言葉にひれ伏す者がいることを知って私は驚いた。私が談志なら「嫌だねえ」と言うところだ。言い回しとしては「業の肯定」というのはよくできている。自分の頭の中でもややもやとしていた考えを、他人が一言で言い表してくればそれは爽快であり、気分もいい。だから、この言葉を誉めるのは私もやぶさかではない。談志は頭がいいとすら思う。けれどもこういう便利なフレーズは一面危険でもある。とりわけ、たかが言い回しにひれ伏す人にとっては大いに危険である。そして、一つのフレーズがその値打ち以上にもはやされるとそれ自体が勝手に動き出し、いつの間にか絶対のスローガンになったりする。そうなった時自分の頭でものを考えたことのない馬鹿が「落語は人間の業の肯定だ」と大声で叫び出し、それを金科玉条のように大

事にするようになる。すべての落語に業の肯定を見つけ出そうとする。危険とはこのことだ。落語には人間の業を肯定していると言えないこともないネタもあるが、業なんぞという大層なものともまったく無関係に出来上がったものもある。『子ほめ』は人間の業を肯定していないし、否定もしていない。屁理屈をつければ『寿限無』だって人間の業を肯定していると言えないことはないが、『寿限無』と人間の業を結びつけるのは馬鹿のやることであって、落語を好きな人間のやることではない。志ん朝はその六十三年の短い生涯のなかで、落語と人間の業の関係など一秒たりとも考えたこともなかっただろう。当たり前だが、その志ん朝の師匠の志ん生も、そのまた師匠の三語楼も、その師匠の円喬も、そのまた師匠の円朝も、やはりそんなことは考えたことは一度もない。彼らが求めたのは客が満足することであり、かつまた笑うことである。業を否定してみせることで彼らの目的に叶うのであれば、彼らはきつとそうしただろう。

私は談志の揚げ足取りをしているのではない。談志は談志で偉大である。そんなことは言われなくてもわかっていると言う人に繰り返したいぐらいに偉大である。ただ無批判にもその業を肯定して、人の考えたことを鵲返しで繰り返すことはやめた方がいいと言っているだけだ。そもそもそうしたことには談志がもともと嫌っていることである。私には談志がもともと嫌っている人たちがこそ、よろこんで「落語は人間の業の肯定である」と言っているようにしか見えない。落語を人間の業という切り口で切った談志は偉いが、同じ台詞を大将首を取ったかのように得意げに繰り返す奴は馬鹿である。それで納得してそれ以上の発想がないのであれば、あとは黙っているぐらいの節度を持つ方がいい。もしもどこかの噺家が「笑いとは緊張の緩

和である」と自説のように語ったら、落語ファンならそいつを笑うだろう。枝雀が発見したその説に納得するのはその人の勝手だが、そう言いだした枝雀ですらその説から離れていったことを考えれば、いまだこの考えにしがみついている奴はやはり自分の頭で考えることを怠っているのと同じかと思えない。談志もまた「イリュージョン」と言っているではないか。頭に耳がついているのは人の意見を聞くためであり、その頭の中に脳味噌があるのはその意見を聞いた上で自分で考えるためである。他人の考え出した美しい理論よりも、それを土台に考え出したささやかな自分の考えの方が少なくとも芸人にはふさわしいということをお忘れはいけない。

## 私の讀大ばなし 拾九

立川談笑

### 『金明竹』

通常の関西弁のくだりを津軽弁にしています。作って十数年場所や客層を選ばないかわいいなネタです。先日、青森県でこの地の皆様を前に初披露する機会に恵まれました。客席は予想以上の歓迎ぶり、大いに感激しました。ビバ、方言！

### 『墓の油』

過酷な現場ほど威力を発揮するタフな演目です。大阪道頓堀では道行く通行人を相手に演りました。新大久保の路上では中南米の外人相手にスペイン語で、この時はどんどん外人が集まってきて最後には「ぜひその薬を買いたい！」って(笑)。

### 参 『堀の内』

「一番好きな落語は？」と尋ねられた時に答える演目です。理屈抜きとにかく楽しい。お祖師様こと妙法寺は私もよくお参りします。永らく庶民に親しまれて歴史はあるけれど、古色蒼然どころか近年の補修で仏像も柱も金ピカに輝いている。私にとって「古典落語」を象徴する場所でもあります。

### ●ほんた：まじゅうさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇一年の「仏の遊」が国立演芸場日本舞集伴作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主夫受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「備の葬式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など

## 三遊亭王楽

（さんゆうてい・おうらく）



三遊亭團楽に入門。平成一六年、二ツ目昇進。好楽を父に持ち、早熟かつ達者な芸で頭角を現した落語界期待の星。二世落語家たちで「ぼっちゃん5」を結成して会を催すなど精力的な活動も嬉しい。いま注目の存在。平成二十年、NHK新入演芸大賞受賞。

## 古今亭菊六

（こんけい・きくろく）



古今亭円菊門下。平成一八年、二ツ目昇進。趣味は競馬に公園でのジョギング。師匠同様心地良い声の高さとテンポで軽妙洒脱に噺を演じる。特に展開を進めるテンポにおいては二ツ目の中でも頭一つ飛び出しており、今後の活躍を期待せずにはられない。

## 三笑亭夢吉

（さんしょうてい・ゆめきち）



三笑亭夢丸に入門。平成一八年二ツ目昇進。動物の出でくる噺を得意タとし、6年目ながら熱烈なファンを増やしつつある。聞く人の気持ちを暖めながらもサゲでは唸らせてしまう将来が期待される若手の一人。前座時代に岡本マキ賞受賞。趣味は「あてもなく自転車でさまようこと」。

## 柳亭こみち

（りゅうてい・こみち）



七代目柳亭燕路に入門。平成一八年十一月、二ツ目昇進。小柄ながら凛とした佇まいと、リズム感溢れる口跡は師匠譲り。小唄、都都逸などもこなし、聞き手をぐいぐいと惹きこむ。今後の活躍も楽しみ「いなせ」で骨太な芸で、本格派として注目されている。

●第3回

## ラジオデイズ

## 若手噺家の会

【日時】12月2日(土)午後7時開演(午後6時半開始)

【場所】お江戸日本橋亭

# こみちが行けば



女流二ツ目の修行日乗⑱

柳亭こみち



弟子は師匠に似る。高座の口調も然ることながら、何年も一緒にいて同じ物を食べていると、胃袋の大きさ、トイレのタイミングまで一緒になる。師匠とは足袋のサイズも同じ。前座時代、朝師匠宅に行ってから足袋を忘れたことに気づき、内緒で拝借したこともあった(もう時効にして頂きたい)。テレビを見ていて笑うツボも一緒。物事の考え方が燕路色に染められているのだ。

家事はおかみさんを真似る。失敗だらけでも目標はいつもおかみさん。今では、料理以外の大半は流儀を体得(したつもり)。自宅の洗剤、掃除用具だっておかみさんが選ぶ物と同じ物ばかり。服は、身長も同じおかみさんのお下がりを今も着ている。

私も含め家族皆が小柄ときているから、燕路宅には似たような生物がうごめいている状態と言えよう。ある日、おかみさんの部屋から「あら〜!」という声聞けばTシャツを裏返しに着ていたという。「あら〜!」と応えた自分の足元を見たら、靴下が裏返しだった。

ある日。外出先で靴を開いた師匠が「なんだこれ?!」中から出てきたのはTVのリモコン。出掛けに慌てて入れたらしい。「師匠、おっちょこちよいだなあ」と思ったその数週間後、「なんだこれ?!」。私の靴からTVのリモコンが出てきた。

そんなに似なくても良いのだけど……。

●りゅうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、吾妻流名取(吾妻巻)。落語協会野球部・チームR所属。

## 味な脇役・話芸のきまり文句

連載第19回

# 運命



松井高志



講演や人情噺では、口演の様式やプロットの都合上、主人公の運命がごく短期間にめまぐるしく転変しなければならぬ(長篇の連続ものであれば、毎回山場がなければならぬ)ので、あたかもそれを「正当化」しようとするかのように、

人間の運命はあらかじめ分かちぬものだ

(講談「三家三勇士」)

といった感慨がセリフで表現される。

日本人は、どうも人の運命や性格が生まれつき定まっただけで変更不能である、という考え方が好きなので(でなければ、占いがいつでもも廃れない理由が見つからない)、こういふ、どこか哀調を帯びた感慨に浸りたがる

のである。

運命の法則性をいう「きまり文句」は、

人間浮き沈み七度(講談「越後伝吉」)

などが典型的な例だろう。どんな人でも、一生のうち七回浮いたり沈んだりすることになつてゐる。だからいちいちよくよくなるな、また良いときも慢心するなということだろう(こういう教訓が講談にはイヤと言ふほど出てくる。諺では「艱難は幸福の母」であつたり、「凶は吉に返る」であつたりする)。

だが、何事にも例外はあり、身を委ねる一方ではなく、工夫次第で定まった自分の運命を切り開いて、志に応じた境遇に到ることができるといふ諺もある。

人は心ほどの世を経る

というのがそれである(藤井乙男の「諺語大辞典」には、「心の正邪清濁によりて、それ相應の生涯を送るとの意」とあるから、必ずしも威勢の良い意味で使われる諺とは限らないが)。

これは、たとえば落語「鼻利き源兵衛」に出てくる。天秤棒をかついで商いをする八百屋・源兵衛は、ある日ふと思ひ立って、この諺を口にする。と天秤棒を川へ投げ捨てて八百屋を廃業し、「先祖伝来の秘法」である失せ物を鼻で嗅ぎ当てて探し出すというはつたり稼業で出世を図る。これはおなじみ「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」といった「分相応の望みを持って」系統の諺の対義句であらう。

●まつい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)、『バンドク』(難読漢字自習帳)、『バジリコ』(江戸に学ぶビジネスの極意)、『アスペクト』など。『話芸 きまり文句』辞典は <http://wagelidom.cooololpgrity.com/>

# オリンパスシンクくる寄席

【会場】お江戸日本橋亭 「杏巷」 2000円  
【時間】午後6時45分開演 午後6時15分開場

●第20回 1月20日◎

柳亭市馬 橘家文左衛門

※予約申込受付中！ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話〇三―三三三―四一―三三〇より、先着順です。

## ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。  
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

12月2日 小田嶋隆（コラムニスト）

9日 石川セリ（ミュージシャン）

16日 小佐田定雄（演芸研究者・落語作家）

23日 野村恭彦（国際大学グローバルコミュニケーションセンター主任研究員）

30日 山崎剛太郎（字幕翻訳家・作家）

## 「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載 <http://www.radiodays.jp>

今最もブックイング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

- 戦後落語論（三遊亭円丈 vs 本田久作）
- 戦後詩人論（高橋源一郎 vs 小池昌代）
- 戦後マンガ家論（養老孟司 vs 内田樹）



そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトようこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

## 霜月の催しふたつ

霜月のラジオデイズはスペシャル月間、先手は第十四回ラジオデイズ落語会スペシャル（十一月八日）。今、天満天神繁昌亭を一番沸かす男、笑福亭福笑師匠を元ヤンキー芸人？林家しん平師匠が迎え撃ちます。開口一番は三遊亭玉々丈さん、「子ほめ」でゆる〜くご機嫌伺い。先鋒はしん平師匠、本日も新作落語で勝負！ネタは「死なない男」。金のない男がちよっとした知り合いに金を借りに行くが、思わず殺してしまう。死体の処理に困った男は知人の首を切断するのだが……。古典落語「首提灯」のようなアンビリバーボー！しん平師匠の不思議な世界に連れ込まれる。続くは待ちに待った上方落語からの初見参福笑師匠。ネタはお馴染み「千早振る」、のはずが福笑流ではただではすまさない爆笑漸に。知ったかぶりもここまで行くと芸術でんあ。仲入り後はしん平師匠。ネタは新作落語「にんじん」。バーに勤める母親を思いやる幼児の気持ちと、彼を思いやる本来は悪戯小僧の小学生の気持ち可愛く泣かせる。現代にも古典落語に通じるテーマがあったのだ。そしてトリは福笑師匠。福笑新作落語の代表作とも言えるネタ「葬儀屋さん」の新宿バージョン！父親の葬儀に集まった兄弟達と葬儀屋さんのやりとりが笑わずにはいられない滑稽味を醸し出す。上方落語の神髄ともいえる笑福亭の滑稽落語を受け継いだ師匠の「笑わせでなんぼや！」笑いを産み出す猛烈パワーに圧倒された夜でした。

一方、第十八回オリンパスシンクくる寄席スペシャル（十一月十三日）は、初お目見えの立川談笑師匠VSラジオデイズでもお馴染み春

風亭百栄（栄助改め）の対決。開口一番は春風亭ぽっぽさん、ネタは「子ほめ」。達者な語り口がまたかわゆいのです。まずは、百栄師匠腰の引けた気の弱そうな強盗がコンビニに押し入りますが、その顛末や如何に？ 演題はそのまんま「コンビニ強盗」。何気ない日常空間に有り得ない展開が師匠の本領発揮です。続く談笑師匠。古典「片棒」と思いきや抱腹絶倒談笑流新作「片棒・改め」で一気にハイモニックホール満員の客を虜に。ドケチの赤螺屋もこんな悴たちでは絶対に死に切れません。底抜けに馬鹿馬鹿しく面白い片棒でした。仲入り後も談笑師匠で季節もの「時そば」。これも図抜けた談笑流。古典の定番もおちおち聴いてはられない爆笑ネタに大変身！ほんとに参った、恐るべきパワーの落語でした。トリは百栄師匠でネタは古典「はてな茶碗」。基本に忠実に演じながらも師匠の持ち味が存分に活かされています。茶金さんのへんてこな京都弁もご愛敬、器用でえぐい師匠の行く末が楽しみではあります。いや〜古典も新作も偽古典も談笑・百栄両師匠は異色派落語界の双璧！ディーブなファンには止められません。（ラジオデイズ寺和尚）

## オリンパスシンクくる寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクくる) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★Rの公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクくる) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すれば OK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクくる (Sync ★R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

## ラジオデイズの窓から

秋から冬へと日々移り変わる景色の美しさに、ついつい手を休め、窓の外に見とれる時間が増えてしまう今日この頃。

師走となりました。今年の大掃除は落語を聴きながら楽しく、また、年賀状書きの合間には目から鱗の文化対談に耳を傾け一休み、といきませんか？ 魅力的な音声コンテンツを続々揃えてお待ちしております。くれぐれもお手を止めてしまわぬようお気をつけて。

